

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：36301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K02352

研究課題名(和文)新移民音楽の受容とフォーク音楽との関係を、音楽言説の観点から検討する

研究課題名(英文)Considering the relationship between the music(s) of new immigrants and folk music, from aspects of the musical discourse

研究代表者

黒田 晴之(Kuroda, Haruyuki)

松山大学・経済学部・教授

研究者番号：80320109

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：1880年代後半ごろからアメリカに渡った「新移民」(中欧・東欧・南欧の出身者で、ユダヤ人も含む)の音楽家は、20世紀当初は活発な活動を行ない、大手・民族別のレーベルを問わず盛んに録音も行なったが、大恐慌によって壊滅的な打撃を受けた。新移民の音楽の顕著な再評価が始まるのは、1970年代後半ぐらいからで、戦後の「フォーク・ブーム」が一段落したころと同期する。これは音楽を対象にした研究や雑誌からも裏付けられる。過去の音源が整理されて研究が進められる一方で、新しい解釈で演奏するミュージシャンも出てきた。東西冷戦の終結などののち、新移民の音楽は、「ワールド・ミュージック」の枠で認知された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1880年代後半からアメリカ合衆国に渡ったいわゆる「新移民」(中欧・東欧・南欧の出身者で、ユダヤ人も含む)の音楽が、20世紀を通じてアメリカ社会にどのように受容されたかを、アメリカ音楽の批評的言説を辿りながら跡付けた。

新移民の音楽は移民共同体では存続していたが、アメリカ音楽の主流からはほぼ無視された。ただし近年はこの手の音楽にも新たな演奏や旧録の復刻の機会が与えられつつある。こうした新移民音楽の無視と復活の実際について、1) 過去から現在までの新移民の音楽活動(公演および録音)、2) 音楽界で指導的言説を形成してきた批評に着目することで、これらの移民文化の社会全体への統合の推移を検証した。

研究成果の概要(英文)："New Immigrants" (those who left from the 1880s Central-, Eastern-, and Southern Europe and settled in the USA, including Jews) played their music actively in the beginning of the 20th century. They recorded, whether for major labels or ethnic labels, their repertoire, but were severely damaged by the Depression. From the late 1970s, these kinds of music were recognized, which synchronized with the end of "the folk music revival" after the war, as far as we survey musicology and music magazine in those days. Old recordings began to be researched and archived, while some musicians performed them with new interpretations. And now, after the end of the Cold War, the music of new immigrants is recognized again within the context of "World Music".

研究分野：音楽文化

キーワード：大衆音楽(ポピュラー音楽) フォーク 新移民 音楽言説 クレズマー レベティコ ギリシャ ユダヤ人

### 1. 研究開始当初の背景

これまで本報告者は主として、東欧ユダヤ人の音楽「クレズマー」(Klezmer music)、ギリシャの音楽「レベティコ」(Rembetiko)を、欧米の移民文化史の観点から研究してきた。これらの音楽については、

- ・マイノリティーが自己主張を始めた1960年代終わりからアメリカで徐々に、
- ・さらには冷戦が終結して東欧・南欧の文化が開かれはじめてからは欧米の双方でますます、

音楽家とレコード・CD 制作者による(再)発見が行なわれ、この動きに欧米の研究者も応えるかのように学術的な成果を発表してきた。クレズマーについては2000年前後に、ドイツの Rita Ottens と Joel Rubin、アメリカの Henry Sapoznik や Yale Strom が先駆的研究を発表し、国内では伊東信宏氏(大阪大学)と本報告者が2010年前後に、これまでの研究を単著などにまとめている。レベティコについては本格的な研究は少ないものの、軍事独裁体制が終わった1960年代後半に単著を出したギリシャ本国の Elias Petropoulos のあとに、オーストラリアの Gail Holst による英語圏初の研究が続いた(1977年)。ドイツでもレベティコを受容と研究は比較的盛んで、ギリシャ近現代史家 Ioannis Zelepos が2001年にまとめた単著が、この分野でのスタンダードとなっている。

クレズマーについてはその新旧両大陸での活動が、欧米の双方で研究されているのとは対照的に、レベティコは欧米で旧録が盛んに復刻されてはいるものの、新旧両大陸を射程に入れた移民史からの研究はまだ少なかった。これはアメリカではユダヤ学の長年の蓄積が厚く、クレズマーも研究環境に恵まれたという事情がある。レベティコの場合はギリシャ本国での録音ですら、ディスコグラフィは未整備のままだった(これは本研究課題の申請時の状況で、この間にギリシャ本国でも、ディスコグラフィが構築されつつある)。これまでに本報告者は欧米で出されたレベティコ関連の文献やCDを渉猟してきた。2017年には論文「『エレニの旅』の影で」で、ギリシャ音楽とユダヤ人との関係をすでに論じている。アメリカのユダヤ系移民とギリシャ系移民は、一部のレパートリーを共有していたが、両者の相互作用を移民文化史として解明するには至っていない。

### 2. 研究の目的

こうした研究の過程でしだいに浮上してきた論点がある。アメリカで「フォーク」と称されるジャンルは戦後から1960年代末の期間に、第2次のリヴァイヴァルを謳歌したが(第1次は1890年代から1920年代まで)、本研究課題が対象とする「新移民」(19世紀末から移民法が制定された1924年までに、東欧・南欧・(旧)オスマンから渡ってきた移民)の音楽は基本的に、「アメリカ」の「フォーク」音楽の概念から排除されてきた。新移民の音楽も各移民の共同体内では演奏されていたが、外部に進出して一般の聴衆に共有されることは稀だった。このことをもっとも端的に示しているのが、Folkways社から1952年にリリースされた復刻アンソロジー、“Anthology of American Folk Music”である。このアンソロジーに収録されている曲を見ると、新移民の吹き込んだ録音の数が限られている一方、WASP やアフリカ系アメリカ人のものは数多く取り上げられている。当アンソロジーの重要性はその後の音楽に影響を与えたという点で大きい(1例としてボブ・ディランによる受容が挙げられる)。この手の音楽はやがて「アメリカ音楽」の主流(「アメリカン・ルーツ」「アメリカーナ」とも言う)となった。ただしその一方で前述のように新移民の音楽は、1970年代終わりと冷戦終結後にようやく(再)発見が行なわれ、近年はますます注目されてくるようになってきた。これら2つの(再)発見の波を精緻に辿ることによって、新移民の音楽をめぐるアメリカでの評価の転換について、その背景を探ることが本研究の最大の目的だった。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究課題に近い先行研究に、Victor Greene による「ポルカ」研究(1992年)がある。Greene の言う「ポルカ」は厳密な意味でのポルカではなく(すなわちチェコやポーランド由来の地域色の強いポルカではなく)、新移民の比較的ダンスブルな曲をすべて含む(だからクレズマーもそこに含まれる)。こうしたジャンルはともすると「低級」なものとして軽視され、“Anthology of American Folk Music”が代表するような音楽言説からは排除されてきたが、この排除のなかにGreeneは音楽批評家の役割と価値観を見ている。これらの音楽のアメリカでの受容はすなわち音楽の性格というよりは、「アメリカ音楽とはなにか」という知識人による言説に左右されている。「アメリカン・ルーツ」という概念の発明も、おなじような言説に基づくものだと見てよい。

(2) このことを探るためにまずは検討すべき時期を、第2次フォーク・リヴァイヴァル期と、冷戦終結前後に絞ったうえで、

研究目的で挙げた資料を収集して分析することからまず始め、“Anthology of American Folk Music”をめぐる研究(現在も批評活動をしている Greil Marcus などによる)、第2次リヴァイヴアル時のフォーク・ミュージシャンのレパートリー、当時を代表する音楽雑誌“Sing Out!”や“Village Voice”に見られる「アメリカ音楽」観を精査し、

冷戦終結前後にかつての新移民の音楽が(再)発見されたさい、この(再)発見を促した言説も当時のメディアから調査した。さらにまた実際にそうした音楽を演奏する音楽家はもちろん、CD 制作者(旧録を編纂してきた)や音楽研究者も、本研究を進めるうえで調査対象とした(ヒアリングも実施)。本研究期間中に具体的にヒアリングできた方は、クレズマーについては、リヴァイヴアルなどに大きく関わった、

Frank London 氏(グラミー賞を受賞したバンド The Klezmatics の設立メンバー)

Henry Sapoznik 氏(バンド Kapelye の設立メンバーで、ニューヨークのユダヤ学研究所 YIVO の Archives of Recorded Sound で初代ディレクターを務め、クレズマーのワークショップ KlezKamp も立ち上げた)

Zalmen Mlotek 氏(ニューヨークのイディッシュ劇場 Folksbiene のアーティスティック・ディレクター)

Shane Baker 氏(イディッシュのコメディアン)

であり、レベティコについては、

Ioannis Zelepos 氏(ボーフム大学に所属するギリシャ近現代史の専門家)

Christina Bacchiella 氏(オーストラリアのギリシャ系住民の文化組織 Greek Fringe のメンバーで、ミュージシャンでもある)

Con Kalamaras 氏(同上)

Fotis Vergopoulos 氏(Greek Fringe にも関わりながら、ギリシャで活動するブズキ奏者)

である。これらの方たちの一部とは、一般市民向け講演会・音楽会も催し、本研究課題に関する知見が得られた。

以上の と を大きな2本柱として研究目的の達成に務めた。

#### 4. 研究成果

こうした研究の方法によって、新移民の音楽活動の推移を明らかにし、本研究課題の成果の一部は、京都人類学研究会のシンポジウム「共同体を記憶するーユダヤ/「ジプシー」の文化構築と記憶の媒体」(このときの内容を元にした論文はのちにオンラインで発表)、本報告者が翻訳したイオアニス・ゼレポス『ギリシャの音楽、レベティコ』(風響社)の解説で発表するとともに、本報告者が総合ディレクターの1人を務めた「Lecture & Concert: レベティコ 東と西のはざままで」(2022年12月、東洋大)、Diasporic Memory, Art for Survival: Music and Art of the Jews, the Roma and the Atomic Bomb Survivors in Hiroshima (2023年3月、京都大)でも報告することができた。以下はその成果の具体的な内容である。

(1) 1880年代後半ごろからアメリカに渡った「新移民」(中欧・東欧・南欧の出身者で、ユダヤ人も含む)の音楽家は、20世紀当初は活発な活動を行ない、大手・民族別のレーベルを問わず盛んに録音も行なったが(こうした移民音楽の録音を“ethnic recording(s)”という)、大恐慌によって壊滅的な打撃を受けた。新移民の音楽の(再)評価は、大きく2つの段階に分けることができる。

第1段階の始まりは1970年代後半ぐらいからで、この時期までのフォーク・ブームが一段落したところと同期する。当時から今日までの音楽雑誌(“Sing Out!”や“Village Voice”など)、民族音楽研究(Richard K. Spottswood によるディスコグラフィ、Pekka Gronow 編纂による論集)、レコードやCDのリリース(Martin Schwarz などによるコンピレーション)からも、このことは実証的に裏付けられる。過去の音源が整理されて研究が進められる一方で、新しい解釈で演奏する音楽家も出てきた。

第2の段階は東西冷戦の終結などののち始まり、この段階で新移民の音楽は、「ワールド・ミュージック」の枠で認知されていく。

主流の音楽と新移民の音楽を対抗的な関係で見るとはなく、「アメリカ音楽」を主流・大衆・周辺・下位といった範疇が影響しあう、時代ごとに変化する現象として見る。こうした視点は“micromusic(s)”もつ「ダイナミズム」に注目する Mark Slobin の考えにも共通する。これまでの本報告者の研究はどちらかと言えば、単体の移民共同体を経時的に辿ってその音楽を検証する、あるいは移民共同体同士の相互作用を記述することに偏りがちだったが、本研究では移民共同体内で実践されてきた音楽から逆に、この移民共同体を取り巻くアメリカ社会全体の言説を、浮かび上がらせた。

(2) ここからは本研究からの派生的な成果を2点挙げる。

ギリシャ音楽のレベティコについては、Ioannis Zelepos 氏の『ギリシャの音楽、レベティコ』を翻訳することで、レベティコ誕生の定説をまず修正することができた。ギリシャは1922年にトルコに軍事侵攻したが敗れ、翌1923年のローザンヌ条約によって、「住民交換」が行なわれたことで、トルコから帰還したギリシャ正教徒が難民化し、かれらの一部がレベティコを始めたという定説である。レベティコの中心的な楽器ブズキは、19世紀の終わりから演奏されていたし、1910年代初めにはすでに、「レベティコ」というジャンル名のあるレコードも録音されていた。

こうしたギリシャ国内での展開とは別に、アメリカに渡った移民による音楽活動の様子も、本研究は部分的に明らかにした。大手での録音としては Marika Papagika による RCA ビクターへの吹き込みがあり、Amalia Bakas という女性歌手(ヘレニズム時代からギリシャにいた「ロマニオット」というユダヤ人)は、ギリシャ語ばかりかトルコ語の歌まで録音している。なかにはルーマニア様式の曲を録音したギリシャ人の音楽家もいた。さらには“Misirlou”という歌を初めて録音したことで知られる Theodotos Demetriades (イスタンブール生まれでありながら、アメリカに渡ったギリシャ系移民)は、ビクターの「外国語部門」のエグゼクティブに登りつめ、1930年代初めにギリシャを2度訪問したさいは、ギリシャ語だけでなくトルコ語やラディーノ語(セファルディーの言葉である)などの歌も含め、現地の音楽家による演奏を録音していることが判明した。

日本政府の文化庁による事業“ARTS for the future!”で招聘された、オーストラリアのレベティコ音楽家からは、オーストラリアは労働党政権下で、1972年に白豪主義から多文化主義に方向転換し、オーストラリアのギリシャ人社会は、移民統合の成功例と見なされているが、ギリシャ文化を守る民間の努力が、現在も続けられている様子についてヒアリングできた。

ドイツでのユダヤ音楽受容については、阪井葉子氏による先行研究『戦後ドイツに響くユダヤの歌 イディッシュ民謡復興』があり、この成果については本報告者も、科研基盤(B)による共同研究グループ「ディアスポラの記憶と想起の媒体に関する文化人類学的研究」で、論点を生産的に検討した。これ以降明らかになったこととして、クレズマーがドイツで「ブーム」(阪井氏による表現)になった冷戦終結前後には、旧ソ連からドイツに逃れたイディッシュの歌手がいたこと、旧ソ連出身でありながら、イディッシュをドイツでドイツ人から学んで、イディッシュの歌手になった演劇・音楽関係者がいたこと、非ユダヤ人によるユダヤ音楽の演奏が、かならずしもドイツ現地のユダヤ人(共同体)からは、積極的には受け入れられず、双方にわだかまりもあったことが挙げられる。これ以降のユダヤ人・非ユダヤ人の受け止め方については、双方の姿勢の変化も含め、今後の研究課題としたい。

コロナのために計3回、研究期間を延長した。延長後の最終年度の2023年3月にも、ドイツおよびギリシャでの調査を計画したが、コロナのため実施できなかった(結果的に未使用額が生じた)。こうした事情にもかかわらず、研究期間を延長したことで、当初計画していた以上の成果があったと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 黒田晴之	4. 巻 27
2. 論文標題 ダガーニの描いた3点の花の絵 (2)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 港(神戸・ユダヤ文化研究会刊行)	6. 最初と最後の頁 46-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒田晴之	4. 巻 26
2. 論文標題 ダガーニの描いた3点の花の絵 (1)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 港(神戸・ユダヤ文化研究会刊行)	6. 最初と最後の頁 30-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒田晴之	4. 巻 3419
2. 論文標題 〔書評〕 阪井葉子『戦後ドイツに響くユダヤの歌』、戦後ドイツはユダヤをいかに想起したか、ポピュラー音楽の視点から光を投げかける	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 6-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒田晴之	4. 巻 10
2. 論文標題 クレスマー、あるいは音の記憶の分有ーークレスマー・リヴァイヴァルまでの道のり	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 コンタクト・ゾーン = Contact Zone	6. 最初と最後の頁 305-335
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 黒田晴之	4. 巻 21
2. 論文標題 「エレニの旅」の影で - - ギリシア音楽とユダヤ人	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 港(神戸・ユダヤ文化研究会刊行)	6. 最初と最後の頁 44-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒田晴之	4. 巻 -
2. 論文標題 ユダヤ音楽の現在を一瞥する(オンラインエッセイ)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本独文学会	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件(うち招待講演 0件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 黒田晴之
2. 発表標題 Under the Musical Umbrellas: Diasporic Scenes of Klezmer Music
3. 学会等名 Diasporic Memory, Art for Survival: Music and Art of the Jews, the Roma and the Atomic Bomb Survivors in Hiroshima (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 黒田晴之
2. 発表標題 「集中討議 アイヒマン裁判、アウシュヴィッツ裁判、そしてその後」の枠テーマで、「トランスニストリアからの告発 アウシュヴィッツ裁判の限界と広がり」
3. 学会等名 神戸・ユダヤ文化研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 黒田晴之
2. 発表標題 レベティコとはなにか？
3. 学会等名 Lecture & Concert: レベティコ—東と西のはざまで(Lecture & Concert: Rebetiko—Between the West and the East) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 黒田晴之
2. 発表標題 タガーニの描いた3点の花の絵
3. 学会等名 神戸・ユダヤ文化研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 黒田晴之
2. 発表標題 阪井葉子さん『戦後ドイツに響くユダヤの歌』をどう読むか
3. 学会等名 ディアスポラの記憶と想起の媒体に関する文化人類学的研究(科研費補助金基盤(B) 課題番号18H00783)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 黒田晴之
2. 発表標題 Old TimeからOld Time Ethnicへ あるクレズマー・アーキヴィストを例に考える
3. 学会等名 ディアスポラの記憶と想起の媒体に関する文化人類学的研究(科研費補助金基盤(B) 課題番号18H00783)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒田晴之
2. 発表標題 東欧ユダヤ人の音楽「クレズマー」をめぐる対話 クレズマティックスの設立者フランク・ロンドン氏を迎えて
3. 学会等名 立教大学(立教大学異文化コミュニケーション学部主催)「東欧ユダヤの音楽「クレズマー」 - リヴァイヴァルと異文化接触を聴く」(国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 イオアニス・ゼレボス(黒田晴之訳)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 304
3. 書名 ギリシャの音楽、レベティコ ある下層文化の履歴	

1. 著者名 黒田晴之(共著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 866
3. 書名 (中欧・東欧文化事典編集委員会編、羽場久美子編集代表)中欧・東欧文化事典(114-115ページ記載のエントリー「東欧ユダヤ音楽」を執筆)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>国際シンポジウムDiasporic Memory, Art for Survival: Music and Art of the Jews, the Roma and the Atomic Bomb Survivors in Hiroshima  <a href="http://www.remembering.jp/images/diasporicmemory.pdf">http://www.remembering.jp/images/diasporicmemory.pdf</a>  Lecture &amp; Concert: レベティコ - 東と西のはざままで(Rebetiko - Between the West and the East)で作成した動画  <a href="https://youtu.be/Isr8D2C1FAw">https://youtu.be/Isr8D2C1FAw</a>  神戸・ユダヤ文化研究会 文化講座の案内  <a href="http://jjsk.jp/event/2021/03/11/2021-02/">http://jjsk.jp/event/2021/03/11/2021-02/</a>  東欧ユダヤ人の音楽「クレズマー」をめぐる対話 ヘンリー・サボズニク氏に聞く、バンド活動(……)  <a href="http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~kuroda/Henry_Sapoznik.pdf">http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~kuroda/Henry_Sapoznik.pdf</a>  東欧ユダヤ人の音楽「クレズマー」をめぐる対話 シェーン・ベイカー氏に聞く、イディッシュ文化と笑い  <a href="http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~kuroda/Shane-san%20Flyer.pdf">http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~kuroda/Shane-san%20Flyer.pdf</a>  クレズマー、あるいは音の記憶の分有 - クレズマー・リヴァイヴァルまでの道のり  <a href="https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/232970?mode=simple">https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/232970?mode=simple</a>  東欧ユダヤ人の音楽「クレズマー」をめぐる対話 クレズマティックスの設立者フランク・ロンドン氏を迎えて  <a href="https://www.facebook.com/permalink.php?story_fbid=1949667378598500&amp;id=100006657698674">https://www.facebook.com/permalink.php?story_fbid=1949667378598500&amp;id=100006657698674</a>  日本独文学会文化コラム「ユダヤ音楽の現在を一瞥する」(H. Kuroda) [J]  <a href="http://www.jgg.jp/modules/kolumne/details.php?bid=142">http://www.jgg.jp/modules/kolumne/details.php?bid=142</a></p>
--



## 6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計5件

国際研究集会 Lecture & Concert: レベティコー東と西のはざままで(Lecture & Concert: Rebetiko— Between the West and the East)	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 東欧ユダヤ人の音楽「クレズマー」をめぐる対話 ヘンリー・サボズニク氏に聞く、バンド 活動とアーカイヴとワークショップ	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 東欧ユダヤ人の音楽「クレズマー」をめぐる対話 シェーン・ベイカー氏に聞く、イディッ シュ文化と笑い	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 東欧ユダヤ人の音楽「クレズマー」をめぐる対話 クレズマティックスの設立者フランク・ ロンドン氏を迎えて	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 国際シンポジウムDiasporic Memory, Art for Survival: Music and Art of the Jews, the Roma and the Atomic Bomb Survivors in Hiroshima	開催年 2023年～2023年

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	Ruhr University Bochum			
米国	National Yiddish Theatre Folksbiene			
オーストラリア	Greek Fringe			
カナダ	University of Toronto			